涙はいらない

御伽人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涙はいらない

【Ｎコード】
Ｎ８２５９Ｆ

【作者名】
御伽人

【あらすじ】
主人公が女子高校生になったばかりの時に、母親が主人公を捨てて、男と一緒に暮らすために、家を出てしまう。捨てられた主人公は母親に仕込まれたウィスキーを飲みながら、ただ無常な日々を送る。

プロローグ

『涙はいらない』

「プロローグ」

私は今日もウイスキーを片手に、街を歩く。舌の根の乾かぬ時に、別れを告げられた母親に会うために。酒に異常に強いのは遺伝のようだ。

１７歳の冬。酒で身体を温めるだというのは、付属した言い訳であるが。外はしらしらと雪が降り続いている。白い雪が空から降っていて、いつまでも降り続けばいいのにと思わず思ってしまった。

アパートから２０分ぐらいでステーキ屋につく。駅の近くのステーキ屋だった。子供の頃、クリスマスにはよく母親と一緒にこのステーキ屋で、二人で祝った。母親は、２４日はいないから、２５日は子供だった私と、ずっと一緒にいてくれる。そんな記憶が鮮明に思い出せた。

店は表参道から裏通りにある。雑誌にも紹介された事もある人気店だ。でも、午後5時半を少し回った頃ではさぞかし席は空いているだろう。

また母親は二人で暮らさないかと手紙で告げてきた。私は無論反対はしない。

――母親は私が高校入学したある初夏の日に、私より男と暮らす方を選んだ。裏切られた気持ちを数日間持っていたが、大学卒業にかかるお金を実の娘の私に残してくれたのは、今でもすごくありがたかった。そのうち、今までよくしてもらえたから、それで満足する事にした。

でも、本心は違うけど。内心は鬱傾向が強くなっていたため、ずっとベッドで横になっていたかった。

一人で生きていけるとはさらさら思っていない。でも、私は、高校は中退。彼氏とも別れを告げて、しばらく一人で家にいる時間がほとんどになった――

そんな取り留めのない事を考えながら歩いている。昔よく行っていたステーキ屋まで後少しだ。喫茶店の方が話しやすいが、奢りなのでまあ不問としよう。

ビル群が立ち並ぶ街を歩き、人々は寒そうに、早く温かい建物の中に入りたそうだ。信号が青になった。歩行者側から信号が青になるのに、気付くのに、数秒かかった。どこかへ消えた理由はどうでもいい。会いに来てくれるだけでもマシなのかもしれないと思った。しかも、二人でやり直せるチャンスは今しかない。

時計を見て、１０分遅れた。茶色くて金色のベルが鳴ってドアが開いた。店内を見渡した。美味しそうな匂いがする。肉なんてしばらく食べていない。店員の声には反応せずに、ウイスキーも飲んだ。もっと大きいボトルを持ってくればいいかなと思った

。店の一角に、もう母親はテーブルに指をカタカタしながら、私を待っていた。

第1話

1.

中学1年の頃からか。私は母が仕事以外に自分の時間があるのをうすうす感づいていた。
その頃は、新しく友人が一人、また一人できて、４人グループで遊んでいた。親友と呼べる友人が一人いて、よく、からかいあっていた。どちらが先に彼氏ができるか、貴重な１０００円を賭けて、競争した。中二の春休み。私が勝利した。走り高跳びの両方選手で、男子とは違う所で練習していたが、一緒に練習をサボって、男子の走り高跳びの選手を眺めていた。
その中でタイプの男子がいる。そう親友に言うと、
「よし。何とかしてあげよう」
「え。まさか……」
「いや。やっぱり自力で勝ち取った方がいいよ。結構格好いいしさ」
「顔はどうでもいいんだけど」
「またまた。そんな事言っちゃって」
そう言いながら、二人はそろそろ練習に戻る事にした。
そして、親友が腹痛で、学校休んだとき。雨が降っていた。やむかなと思ったが、全然やむ気配がない。友人はみんな帰っているし、正直困ったなと思っていた。そして、待ち構えたように、男子の声が私の名前を呼んでくれた。私は隣を見た。
「椎名さん」
その言葉の意味は私がタイプの同じ走り高跳びの選手だった。
「よかったら家まで送っていってあげるよ」
「いいよ。別に馬鹿であってもなくても、風邪を引く時は引くからね。気持ちだけ受け取っておくわ」
私は不整脈になりそうになった。思ってもいない事がすらすらと言

葉に出る。
「いいから。別にストーカーになるつもりはないからさ。それにこんなチャンスを逃すのももったいないしね」
「え？」
「いつも練習中気になったんだ。声をかけるチャンスが欲しくてさ」
それがきっかけで、二人で帰宅する気になった。
話は楽しかった。いつしか打ち解けあい、軽い冗談も言うようになった。帰り道２０分の時間が短く思えた。アパートに着くと、私は携帯のアドレスを書いた紙を渡した。
「帰ってから必ずメールを送るよ」
「うん。そうしてくれたら有難いな」
そして、礼を言った。
「よかったらジュースでも飲んでいく？今誰もいないから」
「それは嬉しいけど、もっと仲良くなれたらでいいよ。じゃあね」
「じゃあね」
私は親友に１０００円をもらう日が近いなと感じた。親友にメールを送ろうとしてやめた。今からお見舞いに行くつもりで、完全に治ってから、今日の出来事を伝えようと思った。

もらった千円でラーメンを親友と食べに行った。安くてうまいラーメン店で、部活が雨だったため、今度は傘を忘れなかった。あれ以来天気予報は欠かさず見るようになった。
「まるでドラマみたいだね。先を越されて正直、不甲斐なく思っている」
「堅苦しい言葉を抜きにして……好きな人はまだいないの？」
「さあ。私の理想が高いのかな？優しくてお金持ちで。格好いい人でユーモアのセンスがある人がいいな」
「芸能界じゃあるまいし。どれか捨てないと一生彼氏できないと思うよ」
「やっぱ」

先を越されて、少しふてくされた顔をしている。こんなに美人なのに。絶対鏡を見つめて一人悦に入っているなという事ぐらいは容易に推測がつく。でも、その表情と言葉は、私だけに見せる表情で、いつもはもっと馬鹿っぽい事を言っている。
親友は明るいから、男女問わず好かれる。４人で行動している時も、うまくバランスをとって、私を置いてかない。かと言って後の二人をないがしろにしない。私はそんな親友を見てなんともいえない気持ちになる。
「ラーメン伸びるよ」
一人でくだらない事を考えているうちに、親友はラーメンを食べ終えていて、私待ちだった。
私は手鏡を見てまんざらでもないなと思っている。腹黒いのは、親友だけじゃないと思った。

私は彼氏とデートした記憶が曖昧だ。緊張していた気がする。遊園地で観覧車に乗っている時にファーストキスをした。ガムの匂いがした。キシリトールのスーとした匂いだ。付き合って1ヶ月目になる。それまで、じっくり関係を深めたかったのに、思春期の男子はとにかく関係を深めたがる傾向があるらしい。私は3ヶ月付き合ったら、体を許す事にする事を決めていた。
その事を親友に話と同じ意見だった。男は妙齢の女と事がなせばそれでいいという事を。そして、親友にも彼氏ができた。お洒落な男子だった。幼馴染の男の子だったようだ。向こうの果敢すぎる告白に戸惑っていたらしいが、親友も満更ではなさそうだ。私たちよりももっと深い付き合いに見えた。一緒に服を買いにいくのが楽しみらしい。私は彼氏と遊ぶのも少しだけ飽きてきた。会話は普通で、間は空かずに喋るのだが、あまり面白くない。ただ付き合って三ヶ月まで後二日。普通に恋愛できる女なら誰もが通る道だ。私は彼氏に伝えた。「好きにしてもいいよ」と。
「そっか」ずっと明後日の夜を待ちわびているのだなと思った。部

活も休みな雨の日に、結ばれる。天気予報を注意深く見ていた。
　初めてラブホテルに入り、お互い最初は上手くいかなかった。それでも、一緒に好きな人と一緒に通じ合うから、ただキスをして終わった。
「悪かった。初めてだから緊張した。次は研究してくるから」
「別に気にしていないよ。次は机上位でしよう」
「もう時間もないしな」
「一緒にお風呂に入ろう」そう私は誘った。そして、二人で心置きなく楽しめた。
　次はできた。今度は部活を風邪で揃って休んだ。痛かったけど、これで私も単なる小娘ではなくなったと思った。
「早くいってくれたから」
「けなされているけど、まあいっか」
「好きだよ」
そう言って、私は抱きしめた。お返しに彼氏も抱きしめてもらった。これが女として最も印象深い出来事になった。いずれ思い返す時が来るだろう。私は家まで送ってもらって、手と手が触れた瞬間手を振った。

第2話

2.

私は母にウイスキーを呑んでみたらと誘われた。酒を呑んでいるみたいだ。男と上手くいかなかったんだと思った。私は初めて酒を呑んだ。最初は清涼飲料新の方が美味しいと思ったが、慣れてくるとなんとも言いがたい美味しさを感じるようになった。１４歳の冬休みに母親と静かに過ごした時間はこれが最初で最後ではないかと思った。

母親は謎が多い人だ。卒業アルバム、写真、年賀状等。過去の痕跡がまったくないのだ。触れられたくないんだ過去に。今も職場を絶対教えてくれないし、母親の両親や親戚はいるのだろうけど、教えてはくれない。ただ、私の父親は名前だけ知っている程度だ。会ってみたいけど、それは母親の裏切りになるのであえてその気持ちを隠している。

酒を酌み交わしながら、母親は喜怒哀楽を出さずに呑んでいる。私もその無言の空気を明るく変えたいが、無理っぽいので、ただ母親の真似事をしてウイスキーを呑んでいた。

「どう味は？」

「美味しい」

「ジュースとどっちが好き？」

「ウイスキー」

「そっか」

それで会話は弾まずに、時間だけが過ぎていく。最後の晩餐みたいだなと密かに思った。二度とこんな風に酒を呑むのは、もう二度とないだろう。直感的にそう思った。母親は何か真剣に悩んでいるように見えた。珍しいなと酒を呑み、母親の様子を観察した。ウイスキーがすぐに空になった。

「ねえ？」
「ん？」
母親は何かを吐露したような感じで、話をし始めた。
「私がもっとお金を稼げたら。いつか私たちが金持ちになって。で、優雅な暮らしになったら嬉しい？」
嫌な感じがした。私は、本能的にこれは、幸せそうで、幸せな話ではない事を予感させた。
「金はないよりあった方が嬉しいけど。でも、今のままでいいよ。友達もいるし、何より二人でいる時も中々楽しめるし。お金が足らなければ、私もバイトをして働くよ」
「そうだね」
そう言ったきり、母親は黙ってしまった。気落ちしている訳ではなさそうだ。それを見て私は辛くなった。以心伝心ってやつだろうか。私は、小遣いで、日曜日の夜に一人で晩酌するようになった。ウイスキーの一番安いものを好んで呑んだ。高いのは母親がたまにプレゼントしてくれた。私は感謝をして、ありがたく安いウイスキーと高いウイスキーを比べて呑んだ。安いほうが呑みやすいかもしれないと思った。味覚がもっと発達すれば、高いウイスキーの魅力にとりこになってしまうかもしれないが。そう思った。
中学の卒業式。私は高校へ進学する前に、親友や友人との別れを惜しんだ。高校は学費が学力に見合った中で学費が一番安い高校を選んだ。

卒業式の前日に、彼氏に別れを告げた。だけど、お互い惹かれあうものがあった。少なくても私はそう思っている。もうこうして話すことすら出来ないのは、ただ切なかった。その切ない温もりを二人とも共有していた。愛情の温もりを微かに残した。何もせずに、ただ私の住むアパートで、ウイスキーを勧めてみた。
「こんなの15歳で呑めるかよ」
「何でも挑戦してみるよも悪くないわよ。さあ、呑んでみて」

「挑戦なのか？お酒は二十歳を越えてからだぞ。まあ、いっか」
やっぱ酒を呑んだことあるじゃんと思いながら、彼氏の様子を見守った。
結果は彼氏の惨敗だった。無理もないか。遺伝だし。嫌がらずにウイスキーを呑んだところが、さらに愛しさが増した。
「缶ビールは飲んだことあるけど、ウイスキーは反則だろう。まだ頭がのぼせている」
「私も最初はそうだったよ」
そう言って、彼氏のプライドを傷つけないように、適当に嘘をついた。
「私が送っていってあげるわ」
食卓の床にべったりと寝ていた彼氏を、そろそろ起こそうと思った。母親に見つかるのも、悪い気がしていた。
「もう閉店だよ」
「……あ？もう夜の七時じゃん」
「今日は特別に私が送ってってあげる。千鳥足はまだ早いでしょ？」
「酔いはだいぶ醒めたけど。そうだな。もう最後だしな」
二人はしんみりとした気持ちになり、そして、家の鍵を閉めて、二人は手を繋がないで、歩いて、出会った頃の印象や、デートの話。もし同じ高校に進学したら、もっと長く付き合えたかなとか。ささやかだけど、綺麗な紫陽花のような話をしていた。思い出の花の色によって、話題が変わっていく。そんな事を考えていくと、少し泣いてもいい夜になるかもしれない。でも、そこまでの人生の深さがないから、恋愛の初心者だから。ただ感傷に浸るだけで終えてしまうかもしれない。
「ここでいいわ。後一分で着くから」
「そっか」
しばらく立ち止まった。最後に。そう言って別れた彼氏に抱きしめられた。
そして、そのまま私は泣いてしまった。彼氏はそれを見て、頭をそ

っとなでてくれた。いつかは忘れる運命だから、私は泣いてしまった。
「女らしい所もあるんだな」
「私が未熟だからだよ」
「そうなの？」
「別れも慣れれば、泣かなくてもすむ。特に人前でね」
「そっか。いつか他人同士で会えるといいな」
私はハンカチで目元を拭って、街灯の光がとても眩しく感じた。
「他人同士で会っても意味ないじゃん」
「やり直せるかもしれないって事だよ」
「大人になったね」
私は泣きながら笑った。夜の暗闇が、別れに情を添えてくれる。灰色のブロック。家の外灯の光。笑い声も聞こえてきた。
「じゃあ」
「うん」
私は静かに抱き付いた身体をゆっくりと離して、ハンカチで涙を拭いた。
「じゃあね」
そう言って、私は早足で家に戻っていった。この瞬間を忘れたくないと思った。
街灯は規則正しく真っ直ぐにあり、私に視界を明けてくれる。やけに眩しく感じるほど、漆黒な夜。星が少し煌いていた。足元は街灯が照らし、上は月が私に光を与えてくれる。春風が吹いて、私は肌寒くて、家に向かって歩いていく。新しい人が待っている。なのに、私は泣いている。こんなに純粋になる事は、もう二度とないんだなと思った。別れが辛くて泣いたとしても、それは理性が純粋さを邪魔する事になるだろう。
肌寒さがさっきの温もりを消してしまった。3月の空は一年の終わりを教えてくれる。でも、やけに月が優しく見えた。

第3話

3

何故か母親は今年の冬から、去年の今頃よりも早く帰宅する。喜ぶべきだが、仕事をクビにされたのかと思うと、素直に喜べない。でも、母親は楽しげに料理を作っている。いつもは惣菜を買って、それをつまみにウイスキーを二人して呑んでいるのに。

「ちひろのために力がつくもの作ってあげるわ。たまには母親らしい所見せないとね」

そう言い終わるな否や、母親はステーキを焼いていた。どこの産地の肉なのかわからないが、とにかくあの母親が料理をしてくれたのには、驚いた。でも、それなら、私でもできそうな気がするが。母親に昔聞かれた。ステーキとご飯だけあれば最高なのに。と言っていたのを覚えておいてくれたのかもしれない。炊飯器は真新しいものだった。ふつふつと湯気が沸いている。午後六時。平日に食べる肉は美味しくて、ご飯が一気に進む。話は弾んだ。こんな事滅多にない。食後の晩酌で、母親は急にいつもの表情になった。

「またあのステーキ屋に行こうね」

私は何か知らないが、１４歳の時、「私がもっとお金を稼げたら。いつか私たちが金持ちになって。で、優雅な暮らしになったら嬉しい？」

と言った言葉を思い出した。それを振り払うように、

「楽しみにしているよ」と答えた。それしか言えなかった。

高校は案外楽しかった。部活はすぐに辞めたが、教室で新しい彼氏と友人と彼氏の友達と四人で弁当を食べていた。私の弁当にするめいかが入っていた時は、笑われてしまった。

「中年のオヤジじゃあるまいし」

「昨日のおかずの残りだよ」

更に更に笑われてしまい、そのまま美味しくするめいかを平らげていった。こんな些細な事で楽しめるのは、いい事だと思う。勉強は足りない部分を友人が教えてくれた。お互い復習になるらしく、テストの点もほとんど差はなかった。これもひとえに友人のおかげだ。私はデートをする時間がほとんどなくて、寂しくて別れたい気持ちが何度もあった。でも、その方が返っていいのかもしれない。私は勉強に精が出るし、彼氏も部活に打ち込める。次第に距離は離れていった。１６歳の春まで学校で何不自由のない女子高生だった。彼氏とは何とか別れずに済み、友達との関係は良好だった。そんないい日々を送っていた。そして、高校生として順調に成長するはずだった。でも、暗いようで明るい日々の別れは突然やってきた。

友人の家に行き、やり終わった参考書を借りて、いつもより遅く帰宅した。午後7時ぐらいになっていて、母親がもう帰っている頃だ。母親はいつもするめぐらいしか食べないから、きっと先に食事を済ませているかもしれないなと思った。ドアを開けると、居間の電気が煌々と光っていた。母親の姿が見当たらない。久しぶりに男と一緒にいるのかもしれないなと思いながら、一通の手紙があった。私宛だった。のりは貼っていない。おそるおそる手紙を取り出す。１枚の手紙だった。

『ごめん。ちひろ。私はあなたじゃなく、違う男と寄り添って生きていく事にしました。貯金は全て、ちひろに充てます。大学までは行けると思います。思えば、ちひろと過ごした最後の一年は、胸が痛かった。ウイスキーを毎日呑んで、近くにいる時。私に似た大事な娘だと思うようになりました。でも、いつかは、大事な娘を捨てて、知らない街に住む事を決意しました。本当に、ごめん。ちひろ』手紙に水滴がついていた。きっと母親の涙であろう。私は捨てられたとは、実感がわからなかった。私は最後に交わした言葉もわからぬまま、母親は私の元を去った。精一杯の母親としての言葉を残して。

高校は中退した。友人と彼氏には、引っ越すからという理由を告

げて、お別れをしてもらった。しばらくはまともに人と話すことはないだろう。
　でも、涙がどうしてもでなかった。何故だろうかと母親がいなくなったその晩、ずっと考えていた。泣けない理由を想像してみた。17年も一緒にいてくれた。邪魔な存在だった私を憎むことなく、愛してくれた。学費と生活費を残してくれた。あの格好良かった、いや格好をつけていただけかもしれないが、とにかく自分のポリシーをかなぐり捨てて、手紙を残してくれた。
私はしばらく、床に寝そべって、今後の将来を考えようとしたが、あれだけ頑張っていた勉強ももう必要としなくなってしまい、今後の生活は混沌としたものになるだろうとぼんやりと思った。
　次第にやつれていき、冷蔵庫の中身もほぼ酒だけになってきた。最初のうちは、身だしなみを整えて、女らしく振舞っていた。身支度を整えて、綺麗なお気に入りの服を着て。
まだ母親がいなくなった実感が湧かなかった。あの手紙をしたためられてから、もう一ヶ月も経つのに。誰もいないし、必要ない。私はあの不安に感じた夜。
「二人でいようね」
と母親に言えば良かったと今でも思い悩み、また、言わなくても言っても、きっと母親は出て行ったであろう。そんな母親は憎む日もあったり、その逆の気持ちになったりした日もあった。一ヶ月で、常にウイスキーの瓶を持たないと平常心を保てなくなった。半分アル中だ。半端だから、捨てられたのかもしれないと、自虐的に感じる思う時もあり、そんな私自身に嫌気が差してきた。たかが母親がいなくなっただけ。父親だったらまだ許せたかもしれない。
　家事は比較的気分のいい午後1時から3時ぐらいにやる。部屋で一番高い電化製品の洗濯機で適当に衣服や下着を洗う。靴はサンダルで、服と下着は毎日替える。しかし、三ヶ月目から、一日の大半は寝る日が続き、仕方なく銭湯のコインランドリーで洗濯物を洗うようになった。酒はこのときから持ち歩くようになった。身体を洗

う場所は自分で決めて、家で洗ったり、銭湯で身体を洗ったりする。廃人にもなれない中途半端な女だと思った。

酒に溺れる日に、いつしか慣れていた。日曜日だけ酒を呑むだけの日を作った。誰も訪れる事もないし、私を抱く男もいない。その日は、7時間だけ起きている。一日の大半は寝込んでいるから、ちょうどいい。気がつくと寝ていて、起きると酒を呑んでいる。ずっとこの調子でやってきた。

貯金もまだあるし、将来の事を考えても無駄な気がして、明るかった生活を懐かしいと思った。中学時代の親友は楽しくやっているかな。中学時代の最初の彼氏はいい彼女が出来ただろうか。なんて考えているのは少しの間で、後はずっとこの先の事を考えている。

私はロングヘアーになり、美容院に行く気力も出ずに、相変わらず一人だった。どうして母親は最後に優しくしてくれたのだろう。割り切ったままなら学校にも行けたのに。

皆知り合いは忙しくて私の事を忘れているのだろう。そう寂しさを感じていた時に、珍しく手紙が届いた。誰かすぐに感づいた。母親からの手紙だ。

『もう一度会えたら会おう。12月25日、午後5時半で駅前のステーキ屋で』

私は静かに泣いた。嗚咽がなるべく漏れないように。やっぱり私は寂しかったんだ。

エピローグ（前書き）

『エピローグ』

私は胸が昂ぶり、本当に縁が切れた人ともう一度会う。母親が私に気づいた。私は目を一瞬そらしそうになったけど、「元気そうで何よりだね」と呟いた。

「ああ」

私は殻になった瓶を机の上に置いて、席に座った。

「痩せたね。ちひろ」

「お蔭様で」

席に座り、水を飲んだ。酔いが解けて、一度捨てられたんだという事実が、私の心を遮光する。注文は一番高い肉だった。しばらく高校を中退したことに驚いたようだ。もっと強いイメージが私にはあったのだろう。私自身は、

「母さんの優しさが私を弱くさせたんだよ」と言わずに、

「勉強が元々嫌いだったからね」とひねくれて答えた。

私は泣かなかった。ただ目の前にいる人が元気そうだったからだ。母親としてではなく、女として生きていく人だ。その母親をすぐに許せる程、大人じゃない。でも、話しているうちに、憎むのも馬鹿らしくなった。また二人で暮らせる。

「単なる酔っ払いの親父だね」

母親はいつになく饒舌ににやりと笑って見せた。その方がいい。私はくだらなくて

「母さんに仕込まれたんだよ」

と言って、周りを見渡した。席は１０席で、カウンターも一文字に１０席ある。窓は曇っていて、若い女性のウェートレスが肉を持ってきてくれた。暖房が強くて、私はコートを脱いだ。母親は黒いスーツを着ている。よく見ると喪服に見えた。

「誰かの葬儀に行ってきたの？」

母親はポーカーフェイスで答えた。
「昔からの友人でね」
それ以上は言わないことにした。母親が帰ってきた理由がなんとなくわかる気がした。
「この特性ソースはいつになってもたまらないね」
「いつからそんなキャラになったの？」
「ん？産まれた時からだよ」
いつも肉ばかりでライスを頼まないのが、わが親子の注文の中身だ。こんなに話す母親を私は見た事がない。それが悲しみを飛ばす優良の方法なのかもしれない。私は、もう一度高校に入り、母親はまた新しい男をつくるのだろう。
今度は絶対ない。お互いの必要性がまだある事を分かったからだ。でも、もし今度、母親が再び私を裏切っても、半アル中にならない気がした。もう一度経験したことを繰り返すほど幼くはない。その時は、私に合う男と結婚しようかと想像した。私と血の繋がった関係はもう終わりにして、私の代で遺伝子を断ち切る事を密かに考えている。また私と同じ境遇するかもしれない子供は作りたくない。恋愛感情は、今はまだなくなっていたが、酒をやめて「全う」な生活をすれば、いずれまた中学校まではいかなくても、高校生ぐらいの恋愛感情は戻るかもしれないと思いながら、肉を噛んだ。

エピローグ

『エピローグ』

私は胸が昂ぶり、本当に縁が切れた人ともう一度会う。母親が私に気づいた。私は目を一瞬そらしそうになったけど、「元気そうで何よりだね」と呟いた。

「ああ」

私は殻になった瓶を机の上に置いて、席に座った。

「痩せたね。ちひろ」

「お蔭様で」

席に座り、水を飲んだ。酔いが解けて、一度捨てられたんだという事実が、私の心を遮光する。注文は一番高い肉だった。しばらく高校を中退したことに驚いたようだ。もっと強いイメージが私にはあったのだろう。私自身は、

「母さんの優しさが私を弱くさせたんだよ」と言わずに、

「勉強が元々嫌いだったからね」とひねくれて答えた。

私は泣かなかった。ただ目の前にいる人が元気そうだったからだ。母親としてではなく、女として生きていく人だ。その母親をすぐに許せる程、大人じゃない。でも、話しているうちに、憎むのも馬鹿らしくなった。また二人で暮らせる。

「単なる酔っ払いの親父だね」

母親はいつになく饒舌ににやりと笑って見せた。その方がいい。私はくだらなくて

「母さんに仕込まれたんだよ」

と言って、周りを見渡した。席は１０席で、カウンターも一文字に１０席ある。窓は曇っていて、若い女性のウェートレスが肉を持ってきてくれた。暖房が強くて、私はコートを脱いだ。母親は黒いスーツを着ている。よく見ると喪服に見えた。

「誰かの葬儀に行ってきたの？」

母親はポーカーフェイスで答えた。
「昔からの友人でね」
それ以上は言わないことにした。母親が帰ってきた理由がなんとなくわかる気がした。
「この特性ソースはいつになってもたまらないね」
「いつからそんなキャラになったの？」
「ん？産まれた時からだよ」
いつも肉ばかりでライスを頼まないのが、わが親子の注文の中身だ。こんなに話す母親を私は見た事がない。それが悲しみを飛ばす優良の方法なのかもしれない。私は、もう一度高校に入り、母親はまた新しい男をつくるのだろう。
今度は絶対ない。お互いの必要性がまだある事を分かったからだ。でも、もし今度、母親が再び私を裏切っても、半アル中にならない気がした。もう一度経験したことを繰り返すほど幼くはない。その時は、私に合う男と結婚しようかと想像した。私と血の繋がった関係はもう終わりにして、私の代で遺伝子を断ち切る事を密かに考えている。また私と同じ境遇するかもしれない子供は作りたくない。恋愛感情は、今はまだなくなっていたが、酒をやめて「全う」な生活をすれば、いずれまた中学校まではいかなくても、高校生ぐらいの恋愛感情は戻るかもしれないと思いながら、肉を噛んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8259f/

涙はいらない

2010年10月10日00時19分発行